フィールドワーク[希望学] 東京大学社会科学研究所

最終回 島野先生の言葉

私は平成4年（1992年）4月、はじめて正式な仕事についた。東京の目白にある学習院大学の経済学部に専任講師としてだった。

大学には月2回教授会というのがあって、授業や、入試、学部の運営など、何時間にもわたり議論する。そしてその後には、きまって何人かの先輩先生からお誘いがあり、目白の町に呑みに出かけた。

呑み会の中心人物は、当時学部長だった島野卓爾先生。ドイツ留学経験を持つ国際経済学の第一人者である先生はダンディーで、厳しいながらも学生には人気があった。同時に江戸っ子気質のさっぱりした性格で、呑んでいるときも先生の周りは笑いがたえなかった。私は島野先生が好きだった。

そんな先生は、呑んでいると、いつもだいたい夜10時くらいを過ぎたころに、新人の私に決まって同じ話をされた。

「いいかい、ゲンダ君、よく聞けよ。ケチなヤツは絶対に良い学者になれない。ケチな人間になってはいけないよ」

私はその言葉を初めて聞いたとき、その意味が理解できないでいた。「ケチな人間？　新人なのにいつもワリ勘で、文句もいわず、つきあってんだけどなあ」

教師の端くれとなって16年、最近になって、島野先生のおっしゃろうとした意味が、やっとわかり始めた気がしている。

高校の先生もそうだろうが、大学の先生も、今とても忙しい。少子化が進み、入学定員の確保が大学運営のための至上命題である。夏休みも返上で高校まわりもすれば、オープンキャンパスや入試説明会などで、先生も頻繁に駆り出される。

また大学もサービス業としての意識の徹底化が求められている。学生による授業評価の目も厳しい。授業を休講にすれば、昔は喜ばれたのが、今では学生は不満を述べる。世間が休日のハッピーマンデーの授業も当たり前だ。

正直に言うが、大学の先生は大学院を出て初めて職を得たとき、先生として就職したという意識は希薄だ。

だいたいが、研究者として採用されたと思っている。当然、大学でも自分のやりたい研究をするのが、仕事だと思っている。

それが就職してみて研究どころか、毎日が雑用の連続であることを知り、愕然とする。できれば雑用で無駄な時間を費やすことなく、研究に没頭したいと願う。

しかし、島野先生は、そんな願いを持つことがケチな発想だと言った。そもそもいったい何が無駄なことなのか。雑用って何だろうか。

たしかにそのとき考えれば、自分の興味とも無関係で、やるのが無駄だと思えることでも、いざ取り組んでみると、意外な発見があったりするものだ。数年前に亡くなった島野さんのケチなヤツになるなという話を、今の私はこう解釈している。

「目先の損得勘定で判断するなよ。迷ったらやってみればいいじゃない。やってみることで、いろんなチャンスが生まれることもあるんだよ」

中公新書ラクレ『希望学』（玄田有史編著）のなかで、希望を持ちやすい人として、独立心、チャレンジ精神、好奇心が強い人というのが、浮かび上がった。しかし、それだけなのか、もっと別の大切なことがあるのではないかと調べ続けた。

そのなかでみつけたのが、「無駄に終わるかもしれない努力を厭わない人こそが、実現可能性のある希望を持てる」という事実だった。

希望学が行った20歳から59歳の約2000人を対象とした調査によれば「無駄な努力はしたくないか」という問いに、「したくない」が44・8パーセント、「ときにはしてもかまわない」が55・2パーセントだった。それぞれの中で実現見通しのある希望を持つ割合は、無駄な努力の否定派では59・7パーセントだったのに対し、受入派は66・7パーセントと大きな開きがあったのだ。

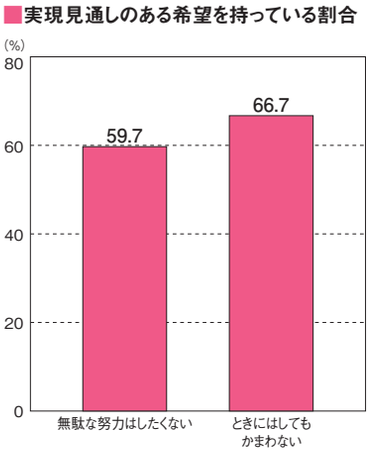
高齢化による財政難や国際競争の激化など、将来の経済見通しが厳しいなか、効率性の徹底が至るところで追求される。高校教育の世界も例外ではないだろう。

しかし、ある先生はおっしゃった。「教育の根本とは、結局、待つことなんです」。待つなんて時間の無駄だと言われたりすることもある。だが、待つことでしか得られない出会いやチャンスがある。それは、恋愛も教育も同じだ。無駄のない世界は、奥行きも、幅も、溜（た）めもない。無駄とは、良い意味での遊びである。遊びのないところに、希望は生まれない。

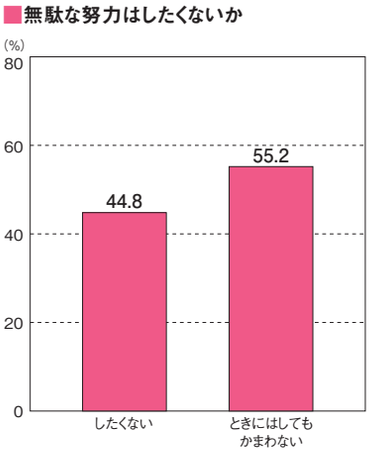
3年間の希望学の成果を踏まえながら、島野さんの言葉の意味を、私は改めて噛みしめている。

（東京大学社会科学研究所教授　玄田有史）

■実現見通しのある希望を持っている割合



■無駄な努力はしたくないか



※2006年1月に実施した、希望学全国郵送調査より。20歳以上59歳以下2,010人から回答を得た。